

# 英雄的な個人を普遍化する— 年代記としての悲劇『キャスタブリッジの町長』<sup>1</sup>

今 村 紅 子

## I

『キャスタブリッジの町長』(*The Mayor of Casterbridge*, 1886)は、トマス・ハーディ(Thomas Hardy)の小説のなかでも構成の整った乱れや破綻の少ない作品であり、主要な登場人物たちの性格付け、舞台や時代設定も統一がとれている。しかし、作家本人にしてみれば、この作品の登場人物の性格には真実味がないために、思うほど完全な作品ではないとハーディは考えていた。(F. E. Hardy 176) この作品は、1886年1月からイギリスの『グラフィック』で絵入り連載小説として、アメリカでは同時期に『ハーバースウィークリー』に掲載されることになった。ハーディは、読者を楽しませて関心をひこうと、メロドラマのような展開を意識したり、物語が急展開するような山場を作ったり、善悪を明確にしたりと、エンターテインメント性を大いに意識した。

作品の舞台となるキャスタブリッジは、ハーディの故郷イングランド南部のドーチェスターをモデルとしている。19世紀半ばのその地方都市は、生活の基盤が農産物の取引を主とする田園に囲まれた町だった。ハーディは、この町の歴史的な商業的側面を、登場人物たちの人生を左右する装置として意図的に物語に組み込んでいる。一方で、キャスタブリッジの町は古代ローマの遺跡の上にある古めかしい幻想的な側面を備えていた。

19世紀後半のイングランド南部農村の状況がハーディ作品と深くかかわっていることは、ダグラス・ブラウンのハーディ論に詳しい。1864年の穀物条例廃止や、1870年代ころにはじまる穀物自由貿易によるあおりが、農村全体へ深刻な影をおとし、労働者の賃金の低下や労働者の都市流出へとつながったこと、1870年代後半の不作で農村の疲弊に拍車がかかったこと、これら同

時代の社会史を理解することがハーディ作品解釈の鍵となり、『キャスタブリッジの町長』における、ドナルド・ファーフレイ対マイケル・ヘンチャードの構図に、都市と農村の対立が重ねられてきたのである。(Brown 31-2)

ハーディはこの作品の序文で「ここで語られる出来事は、おもに三つの事件からなっている」として、そのひとつが「夫によって妻が売られた事件」、二つ目に「穀物条例の撤廃によっておこった凶作」、そして最後に「この土地への王室の訪問」をあげている。

The incidents narrated arise mainly out of three events, which chanced to range themselves in the order and at or about the intervals of time here given, in the real history of the town called Casterbridge and the neighbouring county. They were the sale of a wife by her husband, the uncertain harvests which immediately preceded the repeal of the Corn Laws, and the visit of a Royal personage to the aforesaid part of England. (3)<sup>2</sup>

これらの社会史的な背景が、作品の面白みを増していることは言うまでもない。そして、それ以上にこの作品で注目すべきなのは、ハーディがこれまでにさまざまな作品で描いてきた登場人物たちの苦悩を受け継ぐ主人公ヘンチャードという男の性格であり、平凡な干し草刈りから町長にまで上りつめ、真逆さまに転落していくその生き様である。

ハーディはヘンチャードの性格に、ある種、英雄的な価値を付与しながら、その主人公の人生の普遍化に成功している。ハーディが「年代記作家」としての視点で、個人の苦闘の人生を、距離をとりながら描いたその男は、激情のままに妻子を売りとばし、その結果生まれた罪の意識にとらわれながら、破滅を希求し続ける。この物語は、罪と罰を意識的に描くことを通して、復讐心に燃えながらも究極の悪に手を染めることができない、ひとりの自意識の強い人間の姿を描き出している。そこには、近代人の苦悩や、すべてのハーディが描いたヒーロー／ヒロインたちに通じる感情に翻弄される人物造型の原型がある。

舞台となるイングランド南部の農村地帯について、社会史的な作品解釈が

ある一方で、この作品の悲劇の主人公ヘンチャードの特性が、ギリシア悲劇の主人公やゲーテの『ファウスト』(*Faust*, 1808, 1833)、さらにウィリアム・シェイクスピアの悲劇の主人公たちとの共通点を掲げる多くの解釈がなされてきたことにも触れておく必要があるだろう。(Paterson 151-72; King 107-11; Dike 169-79)

ヘンチャードの野心溢れる姿は、魂を売って超人的力を獲得しようとしたファウストの悪魔的英雄の姿に重ねられてきたばかりではない。シェイクスピアの『リア王』(*King Lear*, 1608)において、本当の愛や真実に気付くのが遅すぎて絶望する激情型のリア王の姿や、父への忠誠心と愛情を失わずに純真な心根を持つ、王の末娘コーディーリアは、ヘンチャードとその娘エリザベス＝ジェインの親子関係を映し出すかのようだ。『マクベス』(*Macbeth*, 1623)の三人の魔女がマクベスの不安をあおった様子は、ヘンチャードがファーマティ売りの老婆に出会い、人生を踏み誤ったことを連想させる。ギリシア悲劇の系譜からは、ソフォクレスの『オイディプス王』で、父殺しという道德律を犯してでも玉座を手に入れようとした男の姿が、ヘンチャードが町長の地位を手に入れるため家族を犠牲にしたその姿と重ねられた。エゴと悪意によってヘンチャードが町長までのしあがり、天の配剤として凶作や混乱によってキャストブリッジの町は衰退した。一方で、道德的に生きた報いとして、ファーフレイとエリザベス＝ジェインのもとには、キャストブリッジの平和と秩序の回復がもたらされた。ここに、勧善懲悪の単純な構図を作品に読み取るのは、あまりにも早計である。『キャストブリッジの町長』の物語は、単純に読み替えのきかない、アンチヒーローとしてのヘンチャードの苦悩をたどった作品なのである。

## II

「19世紀も三分の二にも達しないある夏の晩夏の夕暮れ」、アッパーウェセックス地方のウェイドンプライアーズへと続く道を歩く3人の家族の描写から、物語ははじまる。遠目からは、まるで聖家族を連想する夫と乳飲み子を抱く妻の歩みは、時空を超えた物語のような印象である。語り手の視線が近づくと、夫は手元のバラッドに目をやりながら、さりげなく妻との距離を

置き、自分だけの世界を保とうとしている。

One evening of late summer, before the nineteenth century had reached one-third of its span, a young man and woman, the latter carrying a child, were approaching the large village of Weydon-Priors, in Upper Wessex, on foot. They were plainly but not ill clad, though the thick hoar of dust which had accumulated on their shoes and garments from an obviously long journey lent a disadvantageous shabbiness to their appearance just now [...]

What was really peculiar, however, in this couple's progress, and would have attracted the attention of any casual observer otherwise disposed to overlook them, was the perfect silence they preserved. (5)

ハーディの語り手は、登場人物が自分たちの未来を気にも留めずに歩き続ける様子を、あくまでも傍観者的な語りの立場を保ちながら、必要最小限の情報のみを読者に与えている。語り手は登場人物に寄り添わずに、淡々と客観的な描写を繰り返す。時々、ハーディ自身の声かと思われる過剰なコメントをさしはさんで、人物の性格を特徴づけることもある。

ヘンチャードとその妻スーザンは、見知らぬ土地、ウェイドン＝プライアーズの市にたどり着き、夫は酒に酔った勢いに任せて、妻と娘を水夫のリチャード・ニューソンに5ギニーで売り飛ばす暴挙にでた。この場面は、あまりにも突飛で衝撃的であると多くの非難を受けてきた。しかし、この作品を特徴づける重要な場面である夫による妻売りは、当時の下層階級の離婚の手段として、1830年代によくおこなわれていた行為である。ハーディ自身も、19世紀のイングランドの農村で妻を競売にかけるという事実があったことについて序文で言及している。民事的な結婚の一方で、離婚は莫大な訴訟費用がかかるものだった。妻売りは、いわば、下層階級の人びとにとって、再婚のための民族的な儀礼のような性質を備えていたのである。妻は夫にとって、所有物であり、家畜同然の存在で、妻売りは両者の合意に基づく配偶者の交換として、離婚と再婚を一度におこなえる行為であると解釈された。(近藤 5-

20)

酩酊状態のヘンチャードは、妻を売りそのまま眠り込んでしまい、目が覚めたのは翌朝になってからのことだった。誰一人いないテントのなかで、朝日のなかに光るスーザンの指輪をみつけたヘンチャードは、昨晚自分が妻を競売にかけて馬のように売り払ってしまった事実を思い出して愕然とする。

The morning sun was streaming through the crevices of the canvas when the man awoke. A warm glow pervaded the whole atmosphere of the marquee, and a single big blue fly buzzed musically round and round it [...] Among the odds and ends he discerned a little shining object, and picked it up. It was his wife's ring.

A confused picture of the events of the previous evening seemed to come back to him, and he thrust his hand into his breast-pocket. A rustling revealed the sailor's bank-notes thrust carelessly in. (14)

ヘンチャードの怒りの矛先は自身の失態ではなく、妻売りに同意してヘンチャードのもとを去ったスーザンに向けられる。ヘンチャードにとって重要なのは、妻売りの場面で自分の名前が他者に知られてはいないだろうかという不安や、今後の自分の評判といった自己中心的な問題で満ちている。

妻のスーザンは、ヴィクトリア朝的な「家庭の天使」を彷彿とさせる女性である。夫のエゴイズムのために妻売りの犠牲になりながら、それを受け入れる従順な女性として描かれている。夫とニューソンとの間で5ギニーで売買されることを容認する単純さを持ち合わせているスーザンには、妻は夫の所有物であるという家父長制の考えが染みついていると推察できる。しかし、その単純さや優しさこそがヘンチャードの怒りの一因となり、スーザンの冷酷さとして映るのである。スーザンの存在は、ヘンチャードにとって、「妻売り」という消すことのできない汚点の象徴であり、過去の亡霊として脳裏から離れることはない。スーザンの再登場により、ヘンチャードの人生の歯車は大きく狂いだすのである。

スーザンのほかにも、ヘンチャードの性格や言葉に翻弄されて犠牲となっ

た女たちがいる。ヘンチャードがジャージーで知り合った女性、ルセッタ・テンプルマンである。ヘンチャードとの不純な関係を解消して、正式な結婚を画策した矢先にスーザン親子が登場して、ルセッタの目論見は潰えてしまった。エリザベス＝ジェインは、父親ヘンチャードの片腕となったファーフレイ青年と恋愛関係になりかけたが、結局、ヘンチャードとファーフレイの仲違いにより、恋愛が中断されてしまう。妻のスーザンが死に、ヘンチャードが過去の亡霊から解放されたと思ったころ、女相続人として遺産を引き継いだルセッタは、テンプルマン嬢としてキャストブリッジに現れる。ヘンチャードは今度こそルセッタとの結婚を目論むが、皮肉なことにルセッタの心はファーフレイへと向かい、エリザベス＝ジェインの恋心とは裏腹にルセッタとファーフレイが結婚してしまうのである。

キャストブリッジでヘンチャードに近づくために、ルセッタはスーザンの墓参りをするエリザベス＝ジェインに接近した。しかし、ファーフレイが登場するとすぐに、ヘンチャードからファーフレイへと乗り換えるような軽薄な女がルセッタの本性である。ジャージーにいたころに、空虚な心のヘンチャードを癒すため、分別なく愛人関係を持った過去もある。娼婦のような素顔を持ちながら、今やファーフレイ夫人として華やかな生活を謳歌する二つの顔を持つ人物である。ルセッタとヘンチャードの過去の秘密を書いた手紙が、下層の人間ジョップの手に渡り、スラム街のミクスンレインのたまり場、ピーターズフィンガーで二人の過去が暴露されると、ルセッタは社会的な制裁、スキミティライドの格好の餌食となってしまうのである。下層の人びとと支配者層の逆転現象でもあるスキミティライドは、お上品な文化をひっくり返して、隠された真実を暴く制裁の儀礼である。共同体の儀礼を犯した者や、共同体から敵視されたものに向けられた集団的な制裁であり、儀礼のような様式と、騒がしい音響をともしうその制裁の標的は、地域のおきてや因習になじまない者や個人へと向けられる。つまり、共同体の多数から見れば、目障りな異分子的な存在となった者がその標的となるのである。(近藤 21-50) ルセッタの過去を知った下層の人びとによる悪意ある悪ふざけ、スキミティライドのショックで、ルセッタは精神的打撃を受けて、流産で命を落とす不運な女性としての結末をたどる。これは、ルセッタがヴィクトリア朝の

性的ダブルスタンダードの犠牲者でもあることを象徴している。『キャスタブリッジの町長』で繰り広げられる人間関係や、そこで生まれたほぼすべての愛は行き違いや障害により破綻に終わる。

物語の最後に、エリザベス＝ジェインはかつて恋心をいだいたファーフレイと結婚するが、その直後にヘンチャードはエリザベス＝ジェインの愛を失い、野垂れ死ぬ悲惨な最期を迎える。エリザベス＝ジェインが幸せを得たのは、「幸福というものが苦痛という全般的なドラマの中のほんのわずかなエピソードでしかない」ということを、多くの忍耐を通して理解していたからだといえる。

Her teaching had a reflex action upon herself, insomuch that she thought she could perceive no great personal difference between being respected in the nether parts of Casterbridge and glorified at the uppermost end of the social world. Her position was, indeed, to a marked degree one that, in the common phrase, afforded much to be thankful for. That she was not demonstratively thankful was no fault of hers. Her experience had been of a kind to teach her, rightly or wrongly, that the doubtful honour of a brief transit through a sorry world hardly called for effusiveness, even when the path was suddenly irradiated at some halfway point by daybeams rich as hers [...] And in being forced to class herself among the fortunate she did not cease to wonder at the persistence of the unforeseen, when the one to whom such unbroken tranquillity had been accorded in the adult stage was she whose youth had seemed to teach that happiness was but the occasional episode in a general drama of pain. (252)

エリザベス＝ジェインは、自分の部屋の窓から、すべての出来事を遠くから距離をおいて静かに見つめる。移りゆく状況を観察しながら、ヘンチャードを支え、母スーザンを看取り、ルセッタの話し相手をつとめた。知的で善良なエリザベス＝ジェインにとって、日々の願いが潰えていくことには、日常

の風景のひとつでしかないのである。ハーディの作品世界では、主人公がひとたび夢や希望を持つと、ことごとくすべてが潰えてしまって、破滅の道をたどる逆説的な物語展開が多くみられる。何も期待せず、快楽を放棄して、日々の小さな事柄に感謝しながら淡々と生きた少女エリザベス＝ジェインの成長物語が、ヘンチャードをめぐる悲劇の背後で静かに進行していたのである。

### III

ハーディが現実世界に生きる生身の人間として登場人物たちの人生を描くなかで、多くの主人公たちは貴重な時間を自責の念や罪の意識に苛まれるままに、自己破壊の道へと突き進む性格をもっている。この傾向は、ちょうど『キャスタブリッジの町長』以降、中期小説から後期小説作品において顕著となる。感情の波間に揺れながら、思考や印象、記憶などにとらわれて、舞台上の操り人形のようにひたすら終幕へと突き進んでいく人びとの存在である。ここで、ヘンチャードの性格を分析する手がかりとして、同様の苦悩を抱えながら生きたハーディの後期小説の登場人物たち、ジュードやスー、そしてテスの感情の揺れを分析しておこう。

『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 1895)において、ジュード・フォーリーは、自身の価値を貶めるために酒を飲み、酩酊状態で自分の行いを後悔する。愛するスー・ブライドヘッドが目の前から去れば、飲酒にふけり、スーのいない愛のない人生は価値がないものとして、自暴自棄になって人生を投げ出した。ヘンチャードにしろ、ジュードにしろ、『ダーバヴィル家のテス』(*Tess of the D'Urbervilles*, 1891)のテス・ダービフィールドにしろ、愛情こそが人生の最後の希望であり、愛を失うと自己放棄をはじめ。ヘンチャードは、エリザベス＝ジェインから拒絶されたと感じると、遺書を残して、皆の前から姿を消した。ジュードの場合は、故意に風雨にさらされて死への道を突き進む。つまり、自分に対する尊厳を失うことが自滅へとつながるのである。ジュードは、自分の人生は、すべて自分自身の不徳のいたすところであると思うにつけ、そんな自分に懲罰を与えることで、自身を浄化しようとする。テスにしてもジュードにしてもヘンチャードにしても、自分自身の

内にある疾しい気持ちに耐えられない人びとであり、結果として良心に突き動かされて、自分に苦痛を与え、過酷な仕打ちを通して、罪と不幸に巻き込まれていく。つまり、死こそが救いとなっているのである。テスはエンジェル・クレアとの未来に絶望し、そこにはもう永遠の愛がないと悟ると、アレック・ダーバヴィル殺害の咎での処刑に抵抗することもない。

『日陰者ジュード』のスーの性質は気まぐれであり、気の向くままに自分の感情を放任する意味で、ヘンチャードとの共通点が見えてくる。スーは自己非難を繰り返す人物で、テスのような忍耐を知るすべもない。スーはヘンチャードのように怒りを爆発させることはないまでも、傷つきやすく、不正をみつければ感情的になり、相手を傷つけるような言葉で強く他者を非難する。その後、相手が深く傷ついていることに気が付くと、自己嫌悪に陥り、自身の言葉を悔いて相手に同情し、衝動的な行動で相手を傷つけたことを償おうとする。自分を傷つけるのは、罪悪感からくるもので、そこには懲罰的な意味合いがある。リチャード・フィロットソンとの結婚もスーの罪悪感によるもので、そこに愛はなく、自分の残酷な態度に気付いた結果選んだ自己への懲罰としての結婚であった。

ヘンチャードの場合は、自分自身が常に世界から疎外され、侵害されて、騙されているという卑屈な感情にとらわれている。そう感じるのは、まぎれもなく彼の性格のせいなのだが、その性格に支配されるままに、不幸へと追いやられていく。ヘンチャードが世間に対してとる行動はつねに復讐であり、人生を破滅に追いやる原点はそこにある。つまり、ヘンチャードが行う報復行為は、自分自身にはねかえり彼の人生を破滅へと導くのである。ファーフレイに対して、何度も感情を爆発させてしまうのは、当初愛情をもって接していた人物に、妻売りの秘密を打ち明けてしまった負い目からきている。ヘンチャードは、つねにファーフレイに対して恐れのおもいをもち、疑いの気持ちを向け続けている。罪の意識を攻撃へと変容させるヘンチャードは、ファーフレイが成功すればするほど、憎しみと復讐心とともに罪悪感が膨れ上がっていくのである。最終的にヘンチャードは、良心の呵責に苛まれて、それを昇華させるために償いの道を選ぶ。つまり、自分自身に懲罰を与えたい欲求を根本に抱えるヘンチャードは、最終的に自分に敵意を向ける。テス

やジュードやスーと同様に、自分を苦しめて自身の罪を償うために、自己破壊しようという衝動にヘンチャードは駆られている。敵に向けたつもりの攻撃が、結局、自分に跳ね返って自身を苦しめるに至るのだ。ファーfreyへの復讐心が、殺害という現実味を帯びた途端、かつて好意を持った相手に殺害をもくろんだ自分に対する慚愧の念がうずきだす。嫉妬と復讐心に凝り固まっていた思いは、やがて自己への憎悪となり、ヘンチャードは自身を恥じ、憎み、自分を軽蔑するに至るのである。過去の罪悪への重荷に耐えられなくなったヘンチャードは、世間から軽蔑されていると感じ、その自尊心ゆえに、弁明さえできない状態に陥っている。ヘンチャードはやがて、自身の罪を自分で裁くことを決めて、その罪をみつめながら自身の過失に対する懲罰は何かを考える。それは、キャストブリッジを去り、死を選ぶことであり、遺言は自己と世間を切り離すための手段である。つまり、ハーディの多くの登場人物たち同様に、ヘンチャードは自らを抹消するために自滅の道を選んでいたのである。

#### IV

ハーディが小説を書くとき、芸術をどのようにとらえていたかということを考察するうえで参考になる文言が *The Early Life of Thomas Hardy, 1840-1891* に記されている。(F. E. Hardy 231-2) 芸術とは物事をはっきりと表現する場であるというハーディの認識がここで表明されているのである。読者は書き言葉を通して、すべてを聞き、感じ、そして目の前に広がる世界を見る（想像する）ことができる。そんな言葉の力をハーディは信じていた。つまり、小説が現実世界を切り取り、人間同士の対話や社会を映し出すことはもちろん、現実世界で生きていくなかで様々な鬱屈した思いや衝動に揺さぶられる人びとの心象風景をも小説は浮かび上がらせる。そして、その内面世界に翻弄される人間の姿をも、小説は描きうる媒体であるというのである。

この意味を理解するのに有効なのが、ロマン派の詩人 S. T. コールリッジのフレーズであることを指摘したのがフレデリック R. カールである。ハーディは1882年にコールリッジの言葉をノートに書き記し、その考えに共感した。コールリッジによれば「観客や読者に幻想を起こさせるように心がける

こと」、つまり「完全な妄想と明らかな偽りとの中間にある、ちょうど夢を見ているような精神状態」を作り出すことが創作の上で重要であるというのである。

Hardy once wrote that ‘Coleridge says, aim at *illusion* in audience or readers—*i.e.*, the mental state when dreaming, intermediate between complete *delusion* (which the French mistakenly aim at) and a clear perception of falsity.’ In this ‘suspension of disbelief,’ Hardy found a way of both raising the implausible to philosophic system and demonstrating that art is a ‘disproportioning’ of reality. (Karl 86)

ハーディは小説世界が、現実世界と折り合いをつけることの難しさを説いている。例えば『日蔭者ジュード』のリトル・ファザー・タイムのように、存在自体がリアリズム性の崩壊を招きかねないキャラクターが登場することや、ハーディ特有の運命論的な力の存在、度重なる偶然の一致が、リアリズム小説の枠組みから逸脱すると考えられたのである。カールは、ハーディがコールリッジの思想を参考にしたことに触れたうえで、『キャスタブリッジの町長』はイギリス小説の転換期の作品であり、社会的な記録文学としての役割や精神史をたどる手がかりともなりうる小説として評価した。

## V

「年代記作家」と自身を名乗り、序文では歴史的背景が作品における重要な要素であると、ハーディは読者に対してリアリズム性を宣言しておきながら、『キャスタブリッジの町長』の世界は寓話的な物語構造で溢れかえっている。ウェイドン＝プライアーズの市での家畜の競り、蠟人形、覗きからくり、ファーマティ売りの老婆が鍋をかき混ぜるその空間には、常識や理性を超えた日常とかけはなれた世界観があった。馬の競売がヘンチャードの妻売りの予兆になり、テントで円を描いて燕が外へと飛び立つさまは、ヘンチャードの貧困の元凶である結婚生活からの逃避願望に重なった。

ヘンチャードが逃避の末に、孤立を深めていく状況が寓話的な状況と折り

混ぜて描かれている箇所がある。亡くなった妻スーザンからの手紙をヘンチャードが読むと、自分の娘だと思っていたエリザベス＝ジェインは、実の娘でないことが明らかになる場面である。愛情を注ぐ対象を必要としていたヘンチャードは、血縁に対する執着心が強かった。エリザベス＝ジェインと血縁関係のない現実を突きつけられて、悪魔でも見つめるように立ち尽くすヘンチャードは、世の中が自分を罰するために悪巧みをしているとさえ感じるのである。妻の死後、スーザンとの関係を告白したヘンチャードが本当の親子としてエリザベス＝ジェインと暮らすことを提案した矢先に、二人に血縁関係がないことが露見するのは皮肉なことである。悲痛な思いを抱えて家を出たヘンチャードは、町の北東にある寂しげな地域にたどり着く。

The river—slow, noiseless, and dark—the Schwarzwasser of Casterbridge—ran beneath a low cliff, the two together forming a defence which had rendered walls and artificial earthworks on this side unnecessary. Here were ruins of a Franciscan priory, and a mill attached to the same, the water of which roared down a back-hatch like the voice of desolation. Above the cliff, and behind the river, rose a pile of buildings, and in the front of the pile a square mass cut into the sky. It was like a pedestal lacking its statue. This missing feature, without which the design remained incomplete, was, in truth, the corpse of a man; for the square mass formed the base of the gallows, the extensive buildings at the back being the county gaol. (98)

ヘンチャードの目の崖の下には「黒河」が流れ、崖の上には州の牢獄がそびえ建っている。台座のような奇妙な物体は絞首台で、その上には死体がある。陰鬱な暗闇と調和した牢獄と絞首台を前に、逃れようのない漠然とした雰囲気になんて耐えられなくなったヘンチャードは「いったいどうして、私はこんなところへ来てしまったのだろうか！」(‘Why the deuce did I come here!’) (98) と嘯いた。ヘンチャードの不運は、愛とともに新たな人生を獲得しようとした矢先に、制御できない何かの力によって潰えてしまうことにある。この瞬

間に読者は、ヘンチャードの行く末を絞首台の死体が暗示していることに気がつくのである。

自然の前で人間はとるに足らない無力な存在であることをハーディは繰り返し説いてきた。ヘンチャードはファーマティ売りの老婆の再登場で過去の不正が暴かれた。そして、村はずれの預言者の天候占いに頼ったことで、商売で大損をした。ヘンチャードの精神的な弱さや判断力の欠如と不安感は、ファーマティ売りや預言者が登場する寓話のような世界を通して白日の下にさらされた。現実世界でヘンチャードが築き上げた、ファーフレイとルセッタ、エリザベス＝ジェインとスーザンとの関係は崩れ去り、キャストブリッジの町そのものもヘンチャードを「無き者」として葬り去ってしまった。つまり、寓話的世界と現実世界のふたつの力によって、ヘンチャードは引き裂かれてしまったのである。(Karl 90)

晩夏のウェイドン＝プライアーズの市からはじまったヘンチャードの逃避行の結末は、逃れられない孤独との戦いであり、妻と娘を見捨てた瞬間から、ヘンチャード自身が最後に打ち捨てられるという人生の逆転現象がはじまっていたのである。妻スーザンの死、友人だったファーフレイとの仲違い、ルセッタの心変わり、ニューソンの帰還とエリザベス＝ジェインの喪失。ヘンチャードの人格は、人間同士の絆のひとつひとつが引き剥がされていく過程で、寓話的ロマンスの世界と現実生きるリアリズムの世界のあいだで折り合いをつけることができないのである。ここにもまた、ヘンチャードの悲劇の一因があった。

『キャストブリッジの町長』に寓話的な出来事がつぎつぎと起こるたび、作品に詩的な要素が付与されてきたことは、カールの指摘からも明らかである。その一方で、詩的であるがゆえに、小説自体のリアリズム作品としての限界に突き当たるといふ問題にこの作品は直面してきた。しかし、実のところハーディはこのような寓話的エピソードを作品に丁寧に盛りこむことで、物語のドラマ性を効果的につくりあげることに成功しているのである。たとえば、エリザベス・ジェインとルセッタが、街にうろつく牡牛と遭遇する場面の牛と女性たちとの不安定な距離感は、ヘンチャードと二人の女性たちの関係を暗示していた。女たちが牛から目を離さない間は、獐犢で狡猾な古い

た牡牛も距離をとるが、背を向けるとたちまち二人の女たちを追いかける。最終的に、ヘンチャードが牛の鼻輪につけた棒を抑えて、納屋の蝶番にとめて牛の動きを封じてことなきをえた。かつて獯猛だった牡牛が半分麻痺したようにたじろぐ様は、皮肉にもヘンチャードそのものの姿を映し取っているというのである。(Karl 91) そして極めつけは、ヘンチャードがファーフレイとエリザベス＝ジェインへの結婚祝いとして持ってきた籠の中の鶉が誰にも気づかれずに死んでいる様子が、まさに孤立して暗闇で死にゆくヘンチャード自身の姿であるというエピソードである。ヘンチャードの性質を多角的な側面から読者に伝えるため、実に作りこまれた悲劇がそこにはあったのだ。

## VI

ヘンチャードの妻売りの場面は、全編を通して作品に流れるモチーフの役割を果たしていた。妻売りの事実はずねに主人公の上に重くのしかかり、ヘンチャードの人格が崩壊していく原点であり、根幹となっていた。ファーフレイとの決闘で勝利を手にする寸前に踏みとどまったときも、ヘンチャードは過去に犯した妻売りの非人道的な行いの罪の意識や悲しみに囚われていた。酒が入ったヘンチャードが、反社会的な行動に走る激しい気性や判断力の欠如は、自分が疎外されて騙されていると感じる本人の性格そのものに起因する。その考えこそがヘンチャードの人生を支配し、不幸へと追いやったのである。

妻子を衝動的に売った贖罪として、21年間の禁酒を福音書に誓ったヘンチャードは、改心してカースタブリッジで商売をおこし、町長まで上り詰めた。しかし、妻子が18年後にキャスタブリッジにふたたび現れた瞬間に、ヘンチャードの本当の悲劇が新たに幕を開けた。ファーフレイ青年と友情を築くことに失敗し、ルセッタへの求婚に失敗し、愛のないスーザンと結婚し、エリザベス＝ジェインを娘として手に入れることにも失敗したヘンチャードは、自分がキャスタブリッジに来た時と同じように、何者でもない根無し草のような存在として最後に町を去る。結局、ヘンチャードはひとつとして真実の愛を獲得できなかった。スーザンとの結婚がヘンチャードを社会的に貶

めてしまうことも含めて、全てのヘンチャードの行いにはアンチヒーローとしての性質がある。主人公でありながら、伝統的なロマンスや叙事詩にみられる、英雄的な偉大さや、高貴さに欠けるこの人物の性質こそが、ヘンチャードそのものなのである。そこには、ヒーローとしての側面ではなく、ハーディが描き続けようとしてきた市井に生きる苦悩を抱える普遍的な人間の姿として、ハーディ作品の原型になる人物像がはっきりと描きだされているのである。

## 注

- 1 本稿は日本ハーディ協会第57回大会（2014年11月1日於西南学院大学）での口頭発表原稿を加筆修正したものである。
- 2 *The Mayor of Casterbridge* からの引用は Norton 版を用い、括弧内に頁数を記す。

## 参考文献

- Brown, Douglas. *Thomas Hardy*. London: Longmans, Green, 1954; rev. ed. 1961.
- . *Thomas Hardy: "The Mayor of Casterbridge."* London: Arnold, 1962.
- Dike, D. A. "A Modern Oedipus: *The Mayor of Casterbridge*." *Essays in Criticism* 2 (1952): 169-79.
- Draper, R. P. "*The Mayor of Casterbridge*." *Critical Quarterly* 25:1 (1983): 57-70.
- Cox, R. G., ed. *Thomas Hardy: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1970.
- Draper, Ronald P., ed. *Hardy: The Tragic Novels*. London: Macmillan, 1991.
- Ebbatson, Roger. *Thomas Hardy: "The Mayor of Casterbridge."* London: Penguin, 1994.
- Edmond, Rod. "The Past-Marked Prospect": *Reading The Mayor of Casterbridge.* *Reading the Victorian Novel: Detail into Form*. Ed. Ian Gregor. London, 1980. 222-27.
- Edwards, Duane. "*The Mayor of Casterbridge* as Aeschylean Tragedy." *Studies in the Novel* 4:4 (1972): 608-18.
- Garson, Marjorie. *Hardy's Fables of Integrity: Woman, Body, Text*. Oxford: Clarendon, 1991.
- Gatrell, Simon. *Thomas Hardy and the Proper Study of Mankind*. London: Macmillan, 1993.
- Greenslade, William. *Degeneration, Culture and the Novel 1880-1940*. Cambridge UP, 1994.
- Gregor, Ian. *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction*. London: Faber, 1974.
- Guerard, Albert J. *Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1979.
- Hardy, Florence Emily. *The Early Life of Thomas Hardy 1840-1928*. Hamden: Archon, 1970.
- Hardy, Thomas. *The Mayor of Casterbridge*. 1886. Ed. Phillip Mallett. New York: Norton, 2001.

- . *The Mayor of Casterbridge*. 1886. Ed. Martin Seymour-Smith. London: Penguin, 1985.
- . *Tess of the D'Urbervilles*. 1891. Ed. Tim Dolin. London: Penguin, 1998.
- . *Jude the Obscure*. 1895. Ed. Dennis Taylor. London: Penguin, 1998.
- Howe, Irving. *Thomas Hardy*. New York: Macmillan, 1967.
- Karl, Frederick R. "The Mayor of Casterbridge: A New Fiction Defined." *Modern Fiction Studies*, vol. IV (Autumn, 1960), 195-213.
- Kramer, Dale. *Thomas Hardy: The Forms of Tragedy*. Detroit: Wayne State UP, 1975.
- King, Jeannette. *Tragedy in the Victorian Novel: Theory and Practice in the Novels of George Eliot, Thomas Hardy and Henry James*. Cambridge: Cambridge UP, 1978.
- Larner, Laurence. *Thomas Hardy's "The Mayor of Casterbridge" Tragedy or Social History?* London: Sussex UP, 1975.
- Paterson, John. "The Mayor of Casterbridge as Tragedy." *Victorian Studies* 3 (1959): 151-72.
- Page, Norman. *Thomas Hardy*. London: Routledge, 1977.
- Pettit, Charles P. C., ed. *New Perspective on Thomas Hardy*. London: Macmillan, 1994.
- Maxwell, J. C. "The 'Sociological' Approach to *The Mayor of Casterbridge*": *Imagined Worlds: Essays on Some English Novels and in Honour of John Butt*. Eds. Maynard Mack and Ian Gregor. London: Methuen, 1968. 225-36.
- Miller, J. Hillis. *Thomas Hardy: Distance and Desire*. Cambridge: Harvard UP, 1970.
- Millgate, Michael. *Thomas Hardy: His Career as a Novelist*. London: Bodley Head, 1971.
- Taft, Michael. "Hardy's Manipulation of Folklore and Literary Imagination: The Case of the Wife-Sale in *The Mayor of Casterbridge*." *Studies in the Novel* 13:4 (1981) 399-407.
- Scheweik, Robert C. "Character and Fate in *The Mayor of Casterbridge*." *Nineteen Century Fiction*, vol.21, 1966-7. 249-62.
- Showalter, Elaine. "The Unnaming of *The Mayor of Casterbridge*." *Critical Approach to the Fiction of Thomas Hardy*. Ed. Dale Kramer. London: Macmillan, 1979. 99-115.
- 近藤和彦『民のモラル 近世イギリスの文化と社会』山川出版社、1996年。
- 十九世紀英文学研究会編、監修福岡忠雄、渡千鶴子他『「カスターブリッジの町長」』について  
の11章—小説の読み方・論じ方』英宝社、2012年。